

独り往く小舟

池上晴夫
筑波大学名誉教授

三つの願い

「健康以外に、人間には三つの願望がある。富と名声と自由。天はこのうち二つしか与えてくれない」という。

「富と名声を手に入れば人々に注目され、不自由になる。名声と自由を得ようとする人はしばしば富を失う」というのだ。

僕は、富にも名声にも縁がないし、とりたててその多くを望もうとも思わない。しかし、自由だけは欲しいと思っている。そのためこれまで、講演や執筆や委員会の委員就任などの依頼があってもたいてい断るようになってきたし、世間のしがらみは払い除けるようになってきた。だから、自分勝手なヤツ、変わったヤツ、付き合いにくいヤツ、と思われたに違いない。筑波大学を辞めてから就職した私立大学を、定年までの何年かを残して退職したのも、自由な時間のため

だった。

その結果、いくばくの得べかりし富と名声を失ったかも知れない。世間的にみれば、馬鹿なヤツだということになるだろう。

好きに生きる

しかし僕にとっては、得べかりし収入や名声といってももともと大したものではないのだし、それより自由な時間の方が何十倍も何百倍も大切に思われる。多少の犠牲は払ったことになるかも知れないが、僕は、これからの人生を全く自分の思うとおりに“好きに生きる”自由を手にすることができた。

好きに生きるということは、勝手気ままに生きるのとは、わけが違う。その日その時を、自分が一番したいと思うように過ごすということなのだ。大切な刻一刻の時の流れの内容を自分で決めるといって、贅沢な生き方なのだ。当然、責任も

伴う。怠惰にならず、マンネリにならず、日々こころ新たに、目標をもち、それに向かって精進し、そしてこの自由を満喫したい、と願っている。

「その自由で何をしようとするのかわかるか？」

僕の目標は“木工”と“執筆”である。

十年ほど前、筑波大学の定年を目前にして、定年後の時の過ごし方について考えた。

あと何年生きられるか分からないが、いずれにしても残された時間はきわめて限られている。若い頃は戦争とそれに続く戦後の混乱に翻弄されて、青春を存分に楽しむ機会を逸してしまった世代の一人だ。すでに還暦を過ぎてしまったが、せめて残された時間だけでも、できるだけ楽しく、かつあかあかと燃焼させて生きたい、と願うようになった。

ゼロからの出発

定年後の生き方として、専門知識を生かしてこれまでの延長線上に行くのも選択肢の一つだった、が、僕はその道を選ばなかった。

これ以上歳をとると専門の能力は年々低下する一方だから、これまでの続きをやっていると、

「昨日までできたことが今日ではできない」

の毎日、下り坂を落ちていくようで、あまり楽しそうにも思えない。それよりも何か新しい事をゼロから始めれば、この歳で始めても少しは進歩するだろう。そうすれば、

「昨日までできなかったことが今日ではできる」

の連続で、上り坂を上っていく人生のように毎日新しい発見があり、楽しいに違いない。

あれこれ考えた末、退職金をはたいて家の裏庭に防音と冷暖房完備の十坪ほどの工房を建て、他人があまりやらない無垢の寄木細工を始めたのだった。

木工三昧

案に違わず毎日が楽しく、まさしく木工三昧の境地。毎日、時間が足りない思い。一日がなんで二十四時間しかないのだ、などと愚痴をこぼしたくなるほど。

作るものは、茶托・ペン立て・文鎮・小箱などの小物から、ドアハープ・時計・壁掛・電気スタンドなどのインテリア、それに椅子・テーブル・引き出しなどの家具類など、など。部屋のあちこちに飾り、いずれも世界に一つしかないオリジナルな寄木細工の特注品などと悦

に入っていたが、五年もすると作品が家中にあふれ、埃にまみれて部屋の隅に置き忘れられているのもできた。

そんなとき、ある人から

「人に見せる喜びは作る喜びとちがうから」

と説得されて、つくばのスタジオ S で個展を開いた。三年前のことである。

初日から予想以上に多くの人が見え、説明役は汗だくで、食事もとれないほど。主なものはあらかじめ売れた。それにも増して嬉しかったのは、帰りぎわに残していく「素晴らしい」「感動した」「力を貰った」などの言葉であり、それを聞いてこちらも感動する。

三年置いて去年の秋、二回目の個展を開いたところ、前回以上に多くの人が見え、またしても同様な感想を残していった。滞貨も一掃された。

僕の木工はまったく自分の楽しみのために始めたのだが、結果的にそれが人に感動や喜びを与え、力を与えるとすれば、望外の喜びだ。

「自分のためにしていることが、人の役に立つ」

こう思うと、創作意欲が一段と高まってくる。

独り往く小舟

僕は“木工に賭ける”などと肩肘を張るつもりは毛頭ない。気張りや背伸びや高望みはきっぱり捨てて、気の向くまま、自然体でいこうと思う。他人の目を意識すれば自由が失われる。欲を出せば己を殺すことになりかねない。この歳になって師につけば窮屈だ。だから、我流でよい。マイペースを貫こう。もともと自分の生の充実のために始めたことなのだから。

ただ、

「きのうまではできなかったことでも、きょうはやり逃げよう」

という意欲と、

「きょうはきのうより良くできた」

という満足の毎日でありたい。

もう一つの目標である執筆についてあまり抱負を述べると、あとが苦しくなる恐れがある。だからこれは言わないでおこう。

いずれにしても、これからの僕の行く手は、エンジンも羅針盤もない小舟を漕って、独り大海に行くようなものだ。

「どんな島にたどりつくだろうか。行けるところまで行ってみよう」

というのが現在の心境である。

(いけがみはるお スポーツ医学)